

11府県で大雨特別警報が発表された「平成30年7月豪雨」について

このレポートは2018年7月10日に(株)ウェザーニュースのWebサイトに掲載されたものです

(株)ウェザーニュース

1 はじめに

2018年7月3日から8日にかけて、台風7号の接近や梅雨前線の停滞により、西日本や東海地方の非常に広範囲で記録的な大雨となりました。72時間降水量が広島で444mm、呉で465mm、愛媛県の松山で360.5mmとなり、観測史上1位を記録しました。気象庁は7月6日より11府県に大雨特別警報を発表しました（6日に福岡県、長崎県、佐賀県、広島県、岡山県、鳥取県、京都府、兵庫県、7日に岐阜県、8日に高知県、愛媛県）。福岡県は九州北部豪雨以来1年ぶり、京都府は2013年の台風18号以来2回目、他は県初の特別警報となりました。

今回の記録的な豪雨で死亡が確認された方は、10日2時までに124人となりました。100名を超えるのは1983年に梅雨前線に伴う大雨により鳥根県西部で土砂崩れや洪水が発生するなど、112名が亡くなった「昭和58年7月豪雨」以来のことです。広島県では土砂崩れや河川の氾濫による被害が相次ぎ、45人の死亡が確認されています。また、岡山県では7日に9つの河川が決壊しており、小田川が決壊した岡山県倉敷市では真備町の3割が浸水、4,500棟が冠水するなどし、これまでに29人が死亡、一時1,000人以上が取り残される甚大な被害が出ました。愛媛県でも土砂崩れが多数発生し、25人が死亡しました。この3県で総死者数の85%を占めています。西日本の高速道路では一時、民営化以降最大規模となる2,268km（速報値）の通行止めが発生

しました。鉄道では17事業者56路線（速報値）が一時運休しました。橋の流出や土砂流入などが各線で起きており、復旧には時間がかかる見込みです。

2 被害状況

2.1 被害状況：浸水被害のアンケート調査

非常に広範囲に及んだ被害の全容を明らかにするため、7月7日18時から現地のウェザーリポーターに緊急アンケート調査を実施しました。「一番高いときで、どの高さまで浸水しましたか？」と質問し、「腰以上の高さ」、「ひざ以上の高さ」、「足首以上の高さ」、「大きな水たまり程度」、「浸水なし」、「わからない」から選択いただきました。

9日18時までに届いた約22,395件の回答の中から、被害の回答を抽出したところ、被害が大きい広島県、岡山県、愛媛県だけでなく、京都府以西の広い範囲で、ひざや腰以上の高さの浸水や土砂崩れによる家屋への被害が発生していたことがわかりました（図-1）。

広島県、岡山県、愛媛県では「腰以上の高さ」の浸水が特に目立ちます（図-2）。愛媛県では、「腰以上の高さ」の浸水報告のほとんどが、^{ひじかわ}肱川氾濫の影響を受けた大洲市から寄せられました。一方で、広島県と岡山県の浸水報告のあるエリアは、24時間降水量や48時間降水量が観測史上1位を更新した地点と重なることから、長い時間の大雨が河川氾濫を引き起こし、大規模浸水につながったと考えられます。

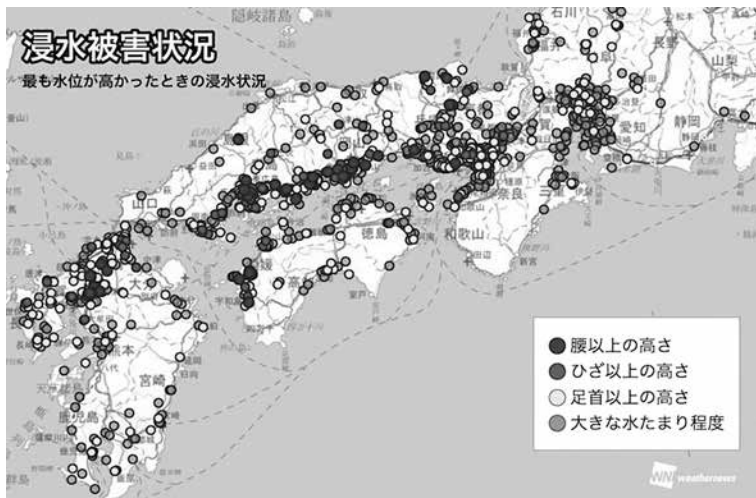


図-1 浸水被害状況（9日時点）

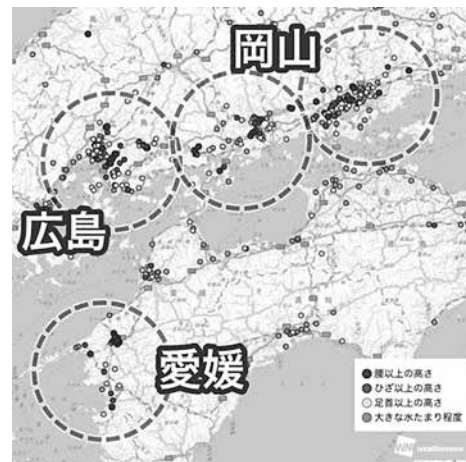


図-2 岡山県・広島県・愛媛県の浸水被害状況（7日時点）

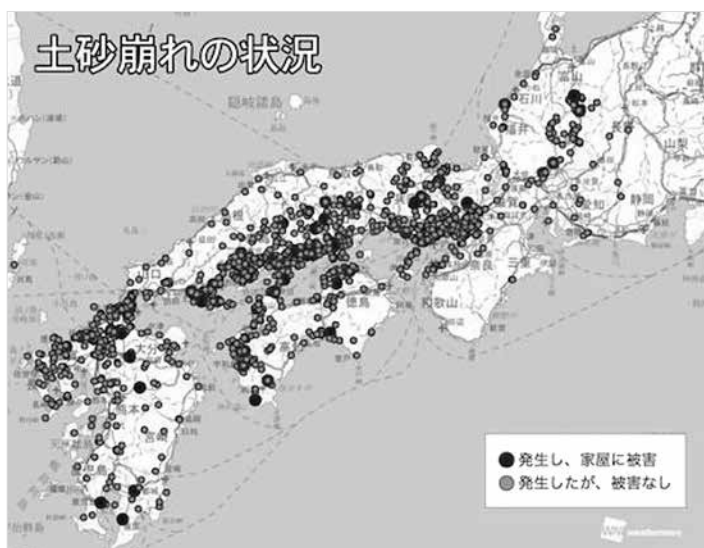


図-3 土砂崩れの状況（9日時点）

【浸水被害状況】

https://weathernews.jp/s/gensai/rain_enq201807/map.html

土砂崩れの状況についても同様にアンケート調査を行いました。7日18時から9日18時までに届いた約22,796件の回答から、土砂崩れが“発生し、家屋に被害”、“発生したが、被害なし”から選択いただきました。土砂崩れで多くの死者が出ている広島県、愛媛県、岡山県を中心に、家屋への被害が広い範囲で見受けられます（図-3）。

2.2 被害状況：災害要因で見た人的被害

当社で10日2時までの人的被害（死者数）を災害の種類ごとにまとめたところ、土砂災害が約6割、河川の氾濫やため池の決壊が約3割、川や用水路への転落が約1割となり、土砂災害による被害が最も甚大であることがわかりました。分布としては、土砂災害による死亡は、広島県、岡山県、愛媛県で多く確認されました（図-4）。一方で、河川の氾濫やため池の決壊については岡山県と広島県の3市町村のみで、場所は少ないものの、死者数としては約3割を占めていることから、一度河川氾濫が起きると大きな被害をもたらすと言えます（表-1）。



図-4 災害要因別の人的被害分布（10日2時時点）